

## 古事記の「千引の石」

小林 芳規

古事記の巻上、黄泉国訪問の条に、イザナキノ命が、その妹イザナミノ命を追って黄泉国に到り、そこで見てはならないイザナミノ命の姿を見てしまった為に、やがて黄泉つ醜女に追われ、最後にイザナミノ命自ら追って来た時、「千引石」をその黄泉つ比良坂に「引き懸へ」て、その石を中に置いて、向き立ち、「事戸」(離縁)を言い渡す場面がある。

この「千引の石」の解釈について、「千人も掛けて引くほどの大きな磐石」(日本古典文学大系本古事記頭注)のような見方が一般であり、又、現行の国語辞典も、この語を項出し、その解釈に「千人で引くような大きい岩」(岩波古語辞典)のような同じ見解を載せるのが普通である。そしてこれで疑問の余地はなさそうである。

しかし、「千引」の語構成を考えると、右の解釈によれば「千」という数を表す語が「引く」という動作を表す語(名詞形)に上接していることになる。数を表す語は現代では「一冊」「二本」「三箇」のように助数詞に上接するのが普通である。奈良時代にも、助数詞に上接して「五寸」<sup>五寸</sup>、「一丈」<sup>一丈</sup>、「八尋」のように用いられるか、又は体言に上接して「二代」<sup>二代</sup>、「十船」のように用いられるのが殆どである。ただ「二行く」(布多由久)、「万葉集三五二六」、「七行く

(那那由久)媛女」(記歌謠)の用法も少数ではあるが存するから「千引」を「千人が引く」とすることも許されそうであるが、「七」が具体的な数を示すのに対して、この「千」は単に数が多いことを示すもので「千尋」などと同意で使われており、しかも、古事記は無論のこと奈良時代の文献では、「千引石」「五百引石」の語形としてしか用いられず、「二行く」「七行く」とは意味や用法を異にするようである。奈良時代の文献で「千引石」「五百引石」という語形に限られるのは、丁度「拳」が「八拳鬚」「十拳劍」などの語形に限られているのに通ずる。この「拳」は握ったこぶしの長さをもとにした上代の長さの単位であり、助数詞である。「引」に動詞「引く」とは別の解釈を求めらば、このような助数詞であれば好都合となる。

「引」が助数詞であることは、雑令の令義解に見出すことが出来る。即ち、「度者分・寸・尺・丈・引也、所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>度<sub>レ</sub>長短也」とあって、「引」が長さを表す単位の一つであり、しかもその中で「丈」より上の最大の単位であることが知られるのである。その読みは「分・寸・尺・丈」が上代文献でそれぞれ「きだ・き・さか・つゑ」であるから、「引」も和語で「ひき」と訓まれた可能性が大きい。

この数の下に付いた「引」の上代文献の例は、右に述べたように「千引石」「五百引石」という語形に、既に慣用語化している。古事記では黄泉国訪問の条の他に、

其の建御名方神、千引石を手末に擎げて来て(巻上、真福寺本四九九行。私に訓下した)

尔して其の神之髪を握り其の室の櫓ごと結び着けて、五百引石を其の室の戸に取り懸へて(巻上、三四〇行)

があり、万葉集でも、同じ語形で、

吾が恋は千引乃石を七ばかり首にかけむも神の諸伏(七四三)

と用いられている。長さの単位としての「引」が他の数詞についたりして自由に用いられた例を文献に拾い難いのは、この語が当時既に古用に属しており、特定語形にのみ残ったからであろう。恰も「拳」が「八拳鬚」「十拳劍」に残ったごとくである。

直径が「千引」(千丈のx倍)や「五百引」の大きい岩という表現には、その力点が岩の大きさ(体積)をいう所にあつて、「重さ」はその大石に附随して生ずるものである。これに対して、「千人で引く」という解釈には、むしろ表現の力点が「重さ」にあつて、大きさはこれに附随する。古事記における「千引石」「五百引石」の用いられた文脈を見ると、「塞へ」という動詞と共用している例がある。この「塞へ」は、進んでやってくるものを止めて妨げる意であるから、その「千引石」や「五百引石」は体積の大きさに、表現の力点がある。従つて、「引」を長さの最大単位と見ることと矛盾しないのである。

では、何故に「千人で引く」という解釈が生じたのであろうか。

一つには「引」が長さの単位として実際に広く使われることが奈良時代には殆どなくなつてしまつたからであろう。もう一つには、既に、日本書紀に「故便以千人所引磐石」とあり、和名抄でも「陸詞曰、磐、大石也、日本紀私記云、千人所引磐石、知比岐乃以之」(卷一)と日本紀私記の説を承けて同じ解釈をしていることも大きい理由であらう。日本書紀は、「千引石」が当時古語として慣用語化しており、「引」が長さの単位であることが忘れられたために、新しい一つの解釈を示したものであり、これが「引||ひく」という文

字面から来る先入感と相俟つて後世にこの解釈が許され伝えられたものである。奈良時代において、慣用語化した語句に当時の新しい解釈を加えたことは、枕詞の「あしひきの」に「足引之」の表記をし、「ちはやふる」に「千磐破」の表記を与えたことによつても窺われるところである。因みに、夫木抄の「宮木ひくちびきのつなも弱るらし」(卷三三・綱)の「ちびきのつな」は、「千引の石」についての後世の解釈が定着し、これに基づく類推によつて新たに作られた語形であらう。

—— 広島大学教授 ——